

あ と が き

ばらく動こうともされなかった。進行中の著作のことを考えておられたのか、モヘンジョダロの印象をまとめておられたのか。「こういうしずかな冥想の場所をもっている日本人からは深い思想もうまれよう」といっておられた。また寺院等で団体客とかちあうと、夫人はつとめてこれに加わって、案内人の説明に耳をかたむけられたが、先生はいつも一人はなれてものを考えて居られ、人気のない「立入禁止」(日本語のみの表示)の建物の廊をいったりきたりされているようなこともしばしばであった。夫人は「彼はどこにいてもあんな風です」と説明していた。

京都で最後に訪れたのは京都大学考古学陳列室であった。陳列品の中に中国の甲骨文字の実物を発見されたときは非常に驚いて、有光教授にほんものかどうかとたずねられ、そうだという返事をえても、なお半信半疑といった顔で、「写真ではいくらも見ているが、実物をみるのははじめてだ」と力をこめていっておられた。

(この小稿を草するにあたって中原与茂九郎教授の御教示をいただいたことを付記し、あわせて感謝の意を表したい。もちろん文責はすべて筆者にある。)

(筆者は関西大学助教授)

あ と が き

○活字印刷による本誌再発足以来第3号目(通巻第8号)を世におくる。64頁建の予定が編集部の手次第でまたもや増頁となり足利会長の容易ならぬ御高配を仰ぐこととなって申しわけがない。会員諸兄姉の御支援と共に編集部一同身のしまる思いがする。

○内容もいよいよ充実しつつある。前号予告のとおり、多彩且つ異色ある原稿をよせられた執筆者各位には感謝にたえない。編集企画の都合で羽田氏に無理なお願いをしたり、岩本氏に論評欄で御容赦願ったり、会員消息では前号と一部前後するなど、いずれも深くおわびしたい。

○会員諸氏中には最近学位を獲得された方がたがたくさんあり慶祝にたえないが、掲載する紙面もないのが残念である。

○次号(9号—本年末上梓)の準備もほぼ成り、10号は中原与茂九郎京大教授退官記念号とする予定でひろくシュメロロジスト、アッシリオロジストの御寄稿を願ひ、すでにいずれも内諾を得ている。これは本邦斯学界の一結集で、本邦における同方面の草創期から多年この学田を開拓されてきた同教授の記念号としてのみならず、いろいろな意味でも一時期を画するものと期待している。

○本号も印刷はあぼろん社社主伊藤武夫氏をわずらわした。深く謝意を表したい。〔編集部記〕